

多摩移転と協力下宿

本学が多摩移転を開始したのは、一九七八（昭和五十三）年のことである。それまで法・経済・商・文の四学部があった駿河台校舎は、学生が大学構内から出て古書店街を散策したり、いろいろな研究機関に行って勉強をするには、便利な都心の一等地にあった。

地方出身の新入生などが下宿をさがす際にも、都内各所をはじめ埼玉、千葉、神奈川など、大学を中心にして三十分から一時間前後の通学圏内に住居を求めることができた。

ところがそのような環境は、多摩移転によって一変する。すなわち、都下西部に位置する八王子を文系四学部の本拠地と定めた結果、学生たちの通学や居住の環境悪化が予想された。そのため大学当局は、多摩校地内諸施設の整備とともに、学生向けの下宿・アパートの斡旋にこれまで以上の対応を迫られることとなった。そこで、移転を一年半後にひかえた七六年十二月、本学は下宿対

策の一環として京王技術センターおよび金融機関との業務提携を行い、戸田修三学長を委員長とする「中央大学協力下宿（アパート）募集委員会」を発足させて、「協力下宿」三、〇〇〇室の建設に力を注いだ。

このようにして始まった協力下宿建設事業は、八王子市、日野市、多摩市などの地元地主の協力を得て募集活動も順調に進み、七七年七月には二、〇〇〇室を超える申込みがあり、八月から順次着工して七八年二月にほぼ完成の目途がたった。同年二月から三月には、学生たちの入居も始まり、多摩校舎が開校した四月の時点で、協力下宿は一、〇〇〇室余が確保され、既存の一般下宿一、三〇〇室と合わせて学生の需要をほぼ満たす戸数が提供できるに至った。この年の新入生の協力下宿入居数は約五〇〇であったから、半数は多摩移転にもなつて引越した二・三年次生の利用に供されたこととなる。

さて協力下宿の建物は、木造または鉄筋二階建てで、

一棟二〇室以内、部屋は六畳もしくは四畳半でバス・トイレ・キッチンが備わったアパートであった。家賃は大学と家主が協議して定め、地域により多少の差はあったが、木造四畳半で一九、〇〇〇円から二五、〇〇〇円の鉄筋六畳まで二、〇〇〇円差で四タイプが標準とされた。

当時の学生生活実態調査によれば、自宅外通学者のうち貸間やアパートで間借り生活をしている学生の生



協力下宿外景

活費は月平均およそ七万円、うち住居光熱費は一五、〇〇〇円ほどであった。移転前の学生下宿といえは、四畳半一間、共同のトイレやキッチン、風呂は銭湯がごく一般的であったから、1DKで民間アパートよりも安い

協力下宿は、独立した居住空間としては申し分のない施設であった。

しかしその一方で、協力下宿の多くは大学に隣接した地域に建設されたため、近くに商店街らしきものはなく、さらに都心からも遠かったため、「大学周辺の協力下宿住まいとなれば、凡そ生活全般を中大にお世話になることになる。『おんぶにだっこ』では、何となく、息が詰まるような気がしてならない」とか「勉強一筋の学生以外あまりお勧めできない」といった学生の声も聞かれた。大学と協力下宿との単調な往復生活を危惧するような意見も生まれてきたのである。

多摩移転から一〇年後の八七年、協力下宿は部屋総数一、四〇五室であったが、バブル経済の到来とともにより快適な学生向けの「ワンルームマンション」などが立地条件のよい場所に登場し始めた影響で、次第に減少していった。

九七（平成九）年二月には、下宿・アパートの紹介業務が学生部厚生課から中大生協不動産事業部に移り、同年四月からは規則の上でも協力下宿の名称は消えていくこととなる。